尊厳死 かごしま
第 30 号

発行　日本尊厳死協会　かごしま
事務局　〒892-0822　鹿児島市泉町1－15
「公益財団法人慈愛会　事務局」内
TEL 099-223-1131　FAX 099-223-2444
URL　http://www5f.biglobe.ne.jp/~osame/sonngen/index-s.html

「日本尊厳死協会かごしま」平成26年度総会・公開講演会

―― 在宅での平穏死 ――

日本尊厳死協会かごしま　理事　濱田　陸三

平成26年5月31日（土）、平成26年度日本尊厳死協会かごしま総会・公開講演会が長尾和宏日本尊厳死協会副理事長を迎えて鹿児島県市町村自治会館で開かれました。

多少交通の便が悪い会場にもかかわらず、約250名の参加を頂き、会場はほぼ満席の盛況でした。また多くの医師にも参加頂きました。

長尾和宏副理事長からは「在宅での平穏死」との演題で講演を頂きましたので、その一部をご紹介いたします。

講演の冒頭、九州、四国がもっとも支部活動が活発だとして鹿児島支部の活動を高く評価して頂きました。

その後、会場の聴衆に「日本全体で毎年の死亡者数は減っているか、増えているか？」という質問をし、挙手で答えを求めました。正解はもちろん「増えている」でしたが、回答者数は減少、増加がほぼ同数でした。「減っている」と答えた人は、その理由として医学の進歩で死ななくなった、と思ったようですが、どんなに医学が進歩しても、人は必ず死ぬものであることを理解する必要があるようです。

長尾副理事長のお話は、あふれるユーモアに少しの毒が混じった、ざっくばらんな語り口で、会場は終始笑いに包まれていました。

先生の絶妙なお話をそのまま再現することはとても不可能ですので、以下長尾語録を羅列することで講演の紹介とさせて頂きます。

現在日本全体で、毎年120万人が亡くなっており、これは神戸市の人口にほぼ匹敵する。2025年には毎年160万～170万人が死亡すると推定されており、日本は「多死社会」となる。

「自分の最期は自分で決める」事が必要だが、現実には自分で決めた人は僅か１％で、残りは家族や医師が決めている。

「平穏死」とは尊厳死とほぼ同義語で、自然死と言っても良いが安楽死とは異なる。
現在日本で議論されている「平穏死」は欧米諸国では当たり前の「死」で、議論にもならない「普通の死」である。従って欧米諸国では「平穏死」という言葉はない。欧米諸国では安楽死が切実な問題となっている。安楽死に関しては国によって法律が異なるため、安楽死が認められている国には、安楽死を求める人がはるばる国境を越えて来て、高額なお金を払ってまで安楽死を迎えるという現実がある。

「平穏死」とは誰が平穏なのかを考える必要がある。鎮静剤を投与して患者が平穏となる事ではない。家族や医療関係者が平穏になるためでもない。大切なのは本人の満足である。

長尾先生の嫌いな言葉

1．「告知」→「分かりやすい説明」で良い
2．「余命」→よく外れる
3．「延命」→医療は全て延命であるからあえて延命という必要はない。
（人工呼吸、胃瘻、人工透析は三大延命措置）
4．「遺族」→人類は皆例外なく遺族である

患者自身が平穏死を望んでも、実際にはなかなか希望通りにはならない。

穏やかな最期を阻害するのは

1．ギアチェンジのタイミング「止めどき」
2．「良き死」を想定していない医学教育
3．終末期の「脱水」と「栄養」の誤解
4．無意味な退院調整や退院指導
5．「待てない」こと
である。

私がこだわりたいこと

1．口から食べる事
2．移動する事
3．自力で排泄する事

往生際が悪い3職種は

1．坊主／牧師
2．教師
3．医師／看護師
である。

近藤誠先生の「医者に殺されないための47の心得」に対抗して演者は、「『医療否定本』に殺されないための48の心得」という本を書いた。近藤先生の47に１を加えて48としたが、結果的にAKBと同じになった。

体験入棺の勧め。

死はいつも他人事である。「自分はどこで死にたいか」とか「家族をどこで看取りたいか」はとても重要な決断だが、それすら他人任せの人が多い。まさに「死の外注化」である。一番大切なはずの「最期のとき」が医療者にお任せになっているのが現代日本人。多くの家族は常に傍観者の立場に留まっている。

体験入棺することにより、上から目線ではなく下から目線で死を見つめることができる。

病院死と在宅死の比率は現在8：2である。以前は在宅死が当たり前だったが、これが逆転したのは1976年と、最近の事である。韓国では2003年に逆転し、台湾では昨年逆転した。

ピンピンコロリと死ぬことを希望する人は多いが、ピンピンコロリと死ねるのは僅か5%に過ぎない。95%の人には終末期があるが、終末期かどうかは終わった後に振り返ってしか分からない。リアルタイムには分からない。

末期がん患者の終末期で衰弱しきった患者に抗がん剤を使用して更に衰弱させている。どうしてかと聞くと

医師は「来るから治療する」といい、患者は「来なくて良いと言われないから来る」という。

抗がん剤、延命治療に大切なのは、やる、やらないではなく、いつ止めるか、である。皆で話し合って、自分で決めてほしい。

（ここで、映画「大病人」の一部を上映）

認知症は「不安」が本質である。

認知症の患者が「嫁が財布を盗む」というのは、介護者と被介護者との上下関係による。これは関係性の逆転、すなわち被害者になることでこの上下関係を逆転しようとする事から来る。

介護→快互とし、介護者と被介護者のフラットな関係が必要である。患者に成功体験を持たせることも必要である。

人間は飲まず食わずでも10日間は生きられる。500 mlの水があれば半年は生きられる。人生は柿のようなもので、若い頃のみずみずしい柿が、歳を取るにつれて次第に水分が失われ干し柿となる。従って年寄りには水分は余り必要でなく、点滴も必要ないことが多い。

死亡診断書は、医師が臨終に立ち会わなくても死後にでも書けるが、誰でも書けるわけではない。そのためにはかかりつけ医が必要。

心残り→心づもり（ACPアドバンス・ケア・プランニングAdvance Care Planning）自分が終末期になったとき、治療や療養はどのようにするのか、また延命処置などどのように最期を望むのかを、元気な内から患者自身と家族と医療者でよく話し合い、記録に残しておくことが重要である。

親の死生観をぶち壊すのはいつも「家族」。特に長男。「あなたさえいなければ」

平穏死の実践に求められるものは

1．自己決定の啓発、法的担保
2．やめどきを
3．在宅医療という選択
（地域包括ケア、略して、ちほうケア）

この様に、きわどい部分もあるお話でしたが、そこは先生の人徳とも言うべきか、人生の機微に触れたお話に聴衆一同深い感銘を受けた様子が見て取れました。

「その人らしい最期をささえる」

―尊厳死協会かごしま秋季公開講演会―

日本尊厳死協会かごしま理事・臨床心理士
渡　邉　理　恵

今回の講演会は、在宅でのその人らしい看取りについて訪問看護師の体験と、孫という家族の立場から「関係性の中の死」について語り、参加者から「どのように死を迎えるかを勉強にきたが、どのように生きるかという事を大事にしたい」という意見などが出され、参加者全員で「死に方」について「生き方」について体験を共有する会となりました。

～講演の一部抜粋～

看護師：「私ごとですが、今年３月に母親を自宅で看取りました。本人が生前から強く希望していた延命は行わず、僅かな点滴のみで家族と共に過ごしました。母を看取って葬儀の後、母の兄弟や、父の兄弟やその嫁にあたる方々から「お姉さんが大事にされて嬉しかった。ありがとう。本当に御苦労さま」とお礼を言われました。そこで私は改めて母が様々な役割の中で、様々な方と関係を紡ぎながら生きてきた歴史を感じることができました。そんな経験から最近は「関係性の中の死」を考えるようになりました。「死に様は生き様」と言われますが、私自身がどのような死を迎えるかという事は、他者とどの様な関係性の中で生きていくかということであろうと思います。」

家族（孫）：「在宅で看取ったことで家族関

係にも良い変化があった。尊厳死とは、おばあちゃんの生き方を受け継いでいく事ではないかと思う。」

家族の歴史や関係性は様々であると思われますが、人の死が平穏で、人としての尊厳が大切にされる社会を共に目指していく事を参加者が相互に再確認した公開講演会でした。

平成26年10月26日

平成27年度総会・公開講演会のご案内

と　き：平成27年4月25日(土)　午後2時(開場1時30分)～午後4時　**参加費無料**

ところ：かごしま市民福祉プラザ　鹿児島市山下町15番1号（TEL 099-221-6070）

※駐車場はありますが、なるべく公共交通機関をご利用ください。

演　題：『健やかに生き、安らかに旅立つために』

講　師：日本尊厳死協会かごしま理事　社会福祉士　吉　國　久　子

講師プロフィール

1997年社会医療法人博愛会相良病院緩和ケア病棟開設時より緩和ケアに携わり、がん患者さんご家族への相談援助業務を行っていた。2011年社会医療法人天陽会中央病院緩和ケア病棟開設時より、緩和ケア医療ソーシャルワーカーとして、がん患者さんご家族への相談援助業務に携わっている。

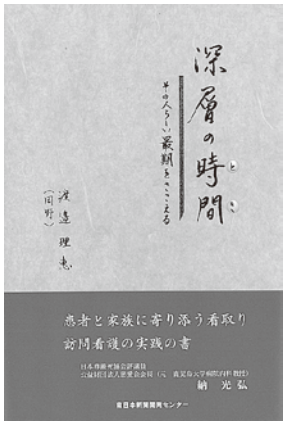
NPO日本ホスピス緩和ケア協会九州支部幹事

著書のご案内

九州支部かごしまの渡邉理恵理事が「深層の時間」を出版いたしました。

ご自身の長年にわたる「在宅での看取り」の数多い経験の中で、特に印象に残った9名の方に関しエッセイとしてまとめたものです。

ぜひともこれを出来るだけ多くの方に読んでいただきたいと思います。



定価1,200円
鹿児島市城西1丁目23-23
鹿児島こども訪問看護ステーション　渡邉理恵
TEL　099-298-1172　FAX　099-204-0131

“尊厳死出前講座„のご案内

この講座は、日本尊厳死協会の会員以外の方々でも、皆さんのご要望や申込みにお応えして、私共の役員がおうかがいして「安楽死と尊厳死の違い」など尊厳死に関わるさまざまな問題についてご説明したり意見交換を行うものです。

・申し込みできるのは
10人以上で構成される団体やグループなど、

・時間・場所は
時間は原則として90分以内、日程と開催場所は講師の都合と調整させていただきます。

・講師料等は
講師料は原則として無料ですが、会場使用料や講座に必要な器具等は、申込者で用意していただきます。
なお、鹿児島市内から遠隔地の場合は、交通費の負担に関して相談させていただく場合があります。

・申込みは
①団体名②代表者名及び担当者③連絡先住所及び電話番号等④希望日時⑤希望講座内容（出来るだけ詳しく）⑥実施会場
上記を事務局までご連絡下さい。

★　会員の声、読者の声への投稿をお待ちいたしております。